

語源覚え書き 3

河野庸二

はじめに

前回、前々回につづいて筆者の語源メモから第3編をまとめることができた。このシリーズを英文によらず日本語で発表してきたのにはいささか訳がある。内容を必ずしも英語語源に限定することなく、堅苦しい論文調をできるだけ避けて、なるべく伸び伸びとエッセイ風に綴っていきたいという気持ちの現れと考えていただきたい。各章の配列も今回は特に書き上げた順に、無造作に並べる方法をとった。

マリオ・ペイの「無知」

著名な学者でも時には何でもないようなことで間違いを冒すことはこれまでにもたびたび指摘してきたが、あのマリオ・ペイのような碩学でも意外なもろさを露呈している場合がある。彼の著書 *What's in a Word* の第3章 *The Language of Colors Is Not International* に2つの国のパトカーを比較した一節がある。

…Our police wagon, “Black Maria,” is in Austria *der grüne Heinrich*, “green Henry” (here there may be reference to the actual color of the vehicle; the shift of gender is interesting).⁽¹⁾

これを見るとペイ教授が19世紀オーストリアの大作家 *Gottfried Keller* (1819-1891) の代表作 *Der Grüne Heinrich* を知らなかったことが一目瞭然である。ケラーの長編『緑のハインリッヒ』は日本では、実際に読まれたかどうかは別として、一世代前の世界文学全集の一冊として入っていたものである。ところで、珍しくも新版のブリタニカ百科事典は *Keller* の項に、ごていねいにもこの作品のあらすじまで載せている。特筆に値するケラーの代表作であればこそであろう。

Green Henry (so called because his frugal mother made all his clothes from a single bolt of green cloth) sets out to become an artist. After some success and many disappointments, he returns to his native city and wins some respect and contentment in a modest post as a civil servant. ⁽²⁾ (下線筆者)

もしペイ教授がケラーのこの代表作を知っていたら、アメリカとオーストリアでパトカーの「性別」が違うのに別段興味を引かれなかったはずである。それにつけても思われるのはわが国と欧米の出版事情の違いである。日本であれば、ドイツ文学の研究者でなくともちょっとした文学愛好家なら、たとえば世界文学全集のカタログを通してでも、ケラーのこの傑作の存在を知ることができるのである。一方欧米には World Classics のような叢書はあってもドイツ語圏以外でケラーの作品を取り上げる可能性はまず考えられない。マリオ・ペイの「無知」はこういう出版事情の違いとまったく無関係ではないであろう。

いま一つ、同書の第4章 What's in a Name では日本人の名前に触れ、その特徴の要約を試みているが、その短い一節は2つの誤りを含んでいる。

Japanese names are often descriptive of virtues, like Tadeshi, "Righteousness." Others are numerical, like Ichiro, "First Boy." Girls' names often end in -ko, "child," or are of poetic nature, like Tori, "Bird." ⁽¹⁾ (下線筆者)

さすがに碩学ペイ教授は日本人の名前の特徴を的確に捉えているが、日本人であれば誰でも2箇所の誤りを指摘できるはずである。まず Tadeshi は Tadashi の誤記に相違なく、また Tori は Hana に改めないはずい。「花」という名はあっても「鳥」という名は実際には存在しないからである。前者の間違いはペイに日本語を教えたインストラクターの発音の誤記であろうが、後者の間違いは何か日くがありそうである。ことによると二世あたりの、日本事情に関する知識の幾分あやふやな人から授かった知識なのかもしれない。「鳥」、「花」という総称でなく、個々の動植物名の場合も事情は同じで、例えば「百合」、「さつき」はあっても「ひばり」は芸名としてしか存在しないと云っても過言ではあるまい。

「バリカン」と「満点」と「アッパッパ」

理髪用具「バリカン」の語源が判明した経緯は周知のことからである。常々「バリカン」の由来を知りたいと思っていた金田一京助博士が本郷あたりの行きつけの理髪店である時おやじに尋ねたところ、「ちょっと待ってください」と言って奥から持ち出してきた古いバリカンに Bariquand et Marre という製作所名が明記してあったというのである。断髪令の出た当時、文明開化の時代には、西洋の文物はすべて輸入品に頼らざるを得なかったに相違なく、理髪用具とても例外ではなかったのである。したがって「バリカン」という名称は、当時この理髪用具が専らフランスの「バリカン・エ・マール社」製のものが輸入されていたことを立証しているわけである。

ところで筆者もこれによく似た体験をしたことがある。今から30数年前、筆者は大学卒業と同時に県立高校の教師として教壇に立つことになったが、赴任地である山口県佐波郡徳地町で当時よく耳にして印象づけられた言葉の一つに、「ゴムぞうり」を意味する「マンテン」があった。「マンテン」は「満点」に違いないと思ったが、その由来は推測するしか他に方法がなかった。「満点」がそのトレードマークに由来することがわかったのは、後年地元のある古老から教示を受けたときのことである。ところがつい先ごろ、夏の終わりに、久しぶりに津和野を訪れて、初めて貸し自転車での散策を試みた折、九州の由布院に做ったのか近年やたらに増えた小規模博物館の一つである、昔の民家風の造りで私設のユニークな津和野今昔館をのぞいてみた。当然展示品はすべて館長の収集によるものばかりであった。展示された古いバリカン類のいくつかに出会ったとき、元地方公務員という館長と親しく話す機会に恵まれた。あいにくそこには筆者お目当てのバリカン・エ・マール社製のものは見当たらなかったが、それでも家畜用のものの中には輸入品、しかもパリからの輸入品もあったのである。当然館長さんには「バリカン」の語源を話したのだが、彼はご存知なかった。そこで「満点」の話を持ち出したところ、意外にもこの方はよくご存知だった。「ええ、そう言いますね。私はまた『天候』のことをいうのかと思っていました。」と館長は言った。つまり、「満天」もしくは「万天」と考えていたわけであろう。「全天候型」という言葉は存在するから、どうやら彼はその略語形「全天」からの類推でそのように考えていたらしかった。いずれにせよ、「満点印」のゴムぞうりが西中国一円に広く普及していたらしいことが判明したのは収穫であった。

一方、「バリカン」の語源がたいていの国語辞典に載せてあるのとはおおよ

そ対照的に、風通しのいい夏の単服「アッパッパ」の方は、どの辞典も語源については一言も触れていない。この語についての最も詳しい説明文と思われるTBSブリタニカ百科事典〈小項目〉の記述は次の通りである。

第1次世界大戦後の大正末から昭和初期にかけて普及した、日本で初めての婦人既製服に名づけられた関西風の俗称。半袖のゆるやかな夏用のワンピースで、日本の気候に合致した簡便さと合理性が人気を呼び、都市から地方へ、やがて全国的に広まった。地味な一重の木綿製で、一般には腰に共布のベルトがついている。この服の普及は女性大衆の洋装化にとって風俗史上意義をもつ一方、国民的創意と西洋文化への順応を示したものとして注目される。⁽³⁾

「関西あたりで言われはじめた俗称」であろうとの察しはつくが、やはり肝心の語源には一言も触れていない。ところが筆者は文芸評論家尾崎秀樹氏の著書の中で、「アッパッパは『吹き抜け』を意味する英語の upper part に由来すると聞いてあっけにとられた。」と書いているのを読んだことがある。告白すればこの時ばかりは筆者自身あっけにとられたのであった。もっとも、「吹き抜け」のことを英語で upper part というわけではない。とにかく風通しのいい夏の単服につけられた名称である。現時点では推測の域を出ないが、おそらく建築用語「吹き抜け構造」の説明文の中にある upper part から来たのではあるまいか。以上のようないきさつもあって、「アッパッパ」は一般には外来語系とは考えられず、表記もどちらかといえば「あっぱっぱ」と平仮名書きされる方が普通なのであろう。

Thalassic という単語

「海」にまつわる数ある英単語の中に、oceanic「外洋の」に対応する thalassic「内海の、近海の」という語がある。ところがこの語の由来についてはどの語源辞典にも [Gk. *thalassa* sea] としか説明されていない。ジョゼフ・T・シップレーの『英単語の起源』には、「馬」を表す hippos に関連して、この語 *thalassa* にまつわる古代のエピソードをかなり詳細にわたって載せてはいるものの、肝心の語の究極の語源については結局一言も触れてはいない。

Xenophon, a disciple of Socrates, wrote *Peri Hippikes* [On horsemanship], giving details for buying, breaking, breeding, riding, arming, etc. When Cyrus of Lydia in 401 B.C. fought his brother Artaxerxes II of Persia, 13,000 Greeks joined his force; one of the Greek generals, Proxenus, invited his friend Xenophon to be a civilian observer. In battle at Cunaxa, near Babylon, Cyrus was killed; the Greek general, invited to discuss peace, were treacherously seized and slain. Xenophon, as he relates in the *Anabasis*, organized the retreat of the surviving 10,000 Greeks; after two years, on the crest of Mt. Thecker, they saw the sea and joyously exclaimed, “Thalassa! Thalassa!” (*Gk thalassa*: sea, whence *E thalassianm*, *halassic*, *thalassophilous*. *OED* lists 10 and details 8 words beginning *thalass*; it lists 4 beginning *thalatto*, the Attic form, as *thalattocracy*.)⁽⁴⁾ (下線筆者)

ところで、耳寄りな情報というものはいつ何時入ってくるものか分からないものである。もっとも *thalassa* の語源に関する情報は20年近く前に偶然得たものであった。シップレーの著書に接するより10数年前のことである。当時、雑誌「現代英語研究」に語源についての読み物が連載されていた。その筆者は東京大学の教授であったと記憶する。おぼろげながら記憶をたどってみると、「元来内陸部に居住していたギリシア人にとって『海』は初めて体験する珍しい現象であり、打ち寄せる波の音を真似て『タラッサ、タラッサ』と叫んだ」という主旨のことが書いてあったと思う。その時の引用文がたしかシップレーの引用する一節と一致していたような気がする。ともあれ、*thalassa* はいかにもオノマトペ的なひびきをもつ語である。そしてもしも人が生まれて初めて海岸に立ったとすれば、誰もまず打ち寄せる波に印象づけられるであろうことを思い、実際の意味の上でも、海上にあって「海」を指す語が *oceanic* であるのに対して、*thalassic* の方はいわば陸上から「海」を指す語である事実を考え合わせるならば、この語源説の正当性はほぼ確実といえそうである。

Southpaw の語源決定版

スポーツ用語の由来の中にはその種目に深くかかわっていないと理解しが

たい場合がある。俗語の研究で名高いイギリスのエリック・パートリッジがアメリカの俗語 *southpaw* の、おそらく彼自身納得のいく信憑性の高い語源説をつきとめることが出来たのも、アメリカ人からの教示を得ることができたからである。

An American correspondent of a Mr John Moore's has sent him this convincing explanation. 'On regulation baseball fields, the batter faces East, so that the afternoon sun won't be in his eyes; the pitcher, therefore, must face West, which in the case of the left-hander puts his throwing arm and hand (or "paw") on the South side of his body.'⁽⁵⁾

公式球場の方位については野球のルールブックにもうたってある程で、特に日照は *day game* の場合プレイそのものに大きく影響を及ぼすものなのである。ただし実際の球場建設にはさまざまな立地条件がからんでくるようで、公式球場といえども必ずしも「ホームプレートが西でセンターが東」という理想どおりの方位にはなっていないとは限らない。とはいえ、真反対になるような方位の球場は存在しないはずである。ところで *southpaw* が誰の造語であるかに関しては、モリス夫妻の語源辞書が、造語した当人である当時のスポーツ記者、のちにユーモア作家として名をなしたフィンレー・ピーター・ダンについて、その息子の証言をそっくりそのまま掲載している。

"According to the best authorities I know, including Prof. Elmer Ellis, who wrote my father's biography (*Mr. Dooley's America*), it was Finley Peter Dunne who originated the expression. The Chicago ballpark faced east and west, with home plate to the west, so a left-handed pitcher threw from the south side. My father, who covered sports for the *Chicago News*, and Charles Seymour of the *Herald* were credited with having introduced the modern style of baseball reporting, concentrating on the dramatic moments in the game and giving character to the players. According to Ellis, both Dunne and Seymour were using, *southpaw* in 1887. My father was 20 years old—and it was not until six years later that he started on the humorous pieces about Mr.

Dooley that made him famous. ”⁽⁶⁾

つまりモリス夫妻は southpaw という語の生みの親の息子であるフィンレー・ピーター・ダン・ジュニアの証言を掲載することによって、当時20歳だった「シカゴ・ニュース」紙のスポーツ記者が1887年頃にスポーツ記事の中で初めて使ったという強力な資料を示したのである。同時にこの証言からは、当初スポーツ欄は野球の勝敗しか報道しなかったのを今日のように試合の山場山場にスポットを当てるように改め、また選手一人一人に個性を持たせた報道のしかたに切り替えたのもこの頃からであることが分かる。思えばクレアランス・デイの名作 *Life with Father* の中に、朝起き抜けにガミガミ親父を出し抜いて朝刊の盗み読みをして、ベッドの中の兄弟に、ひいきチームの勝敗をピアノの曲調で弾き分けて知らせる場面があるが、これこそまさに古い時代の新聞紙上のスポーツ報道の典型だったわけである。つまり勝ち負けの結果だけの報道だったのである。

ところでダンテの『神曲』の英訳等で名高いイタリア系アメリカの詩人ジョン・チアルディは晩年正統2巻から成るすぐれた語源の本を書いた。そのチアルディはこの本の中で Southpaw の語源に関してきわめて重要な指摘を行なったのである。

southpaw A lefty. Originally a left-handed pitcher. By extention, any left-handed person and especially an athlete. [From the self-elaborating impulse of sportswriting that call a baseball a *spheroid* and the home team *the local aggregate*. This one coined in 1880's by Finley Peter Dunne, who was then a young sports-writer for the *Chicago News*. This whimsy is based on the fact that the Chicago ball park was then laid out with home plate to the west. Hence, a left-handed pitcher would be hurling the spheroid with the "paw" on his south side. But despite the self-conscious artfulness of this sort of thing, *northpaw* has never come into use. ⁽⁷⁾ (下線筆者)

チアルディの指摘のするどさは、「スポーツ記事においては、在り来りの表現を使うよりも、えてして持って回った表現を使う傾向がある。」と、スポーツ記者の習性をずばり言い当てたところにある。わが国のスポーツ記者が

「救援投手」のことを「火消し」, 「外人選手」のことを「助っ人」と呼んだりするのを思い浮かべれば, この傾向が洋の東西を問わないことが納得できる。

以上のように, 野球には詳しくないはずのイギリス人パートリッジが皮肉にも, 「公式球場において打者が東向きにかまえる」ことの必然性を教えてくれ, つづいてアメリカのモリス夫妻が southpaw の造語にまつわる経緯を詳細にわたって紹介し, しめくりとしてチャルディによる鋭い指摘が錦上に花を添えているというわけである。要するにここにあげた3つの引用文を併せ読むことによって southpaw の語源説明ははじめて完全無欠なものになるのである。

「幽霊語源説」とテニス用語 love

前の章で引用したジョン・チャルディが語源の本の続編を出版したのは1983年であった。文字どおりチャルディの遺作となったこの本は個性豊かな名著であるが, 著者の自己主張の強さは随所に現れている。一応語源辞典の形式で書かれたこの書を繙読すると, 'spook etymology' という項目がわざわざ設けてあるのに気づく。

In these notes, I use this term to label etymologies invented by language spooks who thrive on free association with no regard for attestation. (An alternative term might have been "guess etymology.") Spook etymologists have long haunted the language, and have been shamelessly ingenious in making up nonfacts in support of their inventions. ...⁽⁸⁾ (下線筆者)

要するに「幽霊語源説」とは「当てずっぽ」の語源説であって厳然たる実証的態度を意に介しないと著者はいうのである。さらに締めくりとしてチャルディは次のような但し書きを付け足している。

Spook etymology is not to be confused with folk etymology, the common and often poetic process. ...⁽⁸⁾

その「幽霊語源説」の典型的な例としてチャルディはテニス用語としての

loveをあげているのである。

love In tennis. Zero, No score, [A simple and undramatic extension from *love* with sense “nothing.” So all for love, not for love nor money, love’s labor lost.]

HISTORIC. A common spook etymology asserts this term to be from Fr. l’oeuf, the egg, probably by association with Am. slang goose egg for “zero.” But French has never used egg in this sense.…… The spook etymology is perhaps a bit more dramatic than the true one, and pretends to a more learned awareness of language, but spook etymologists always prefer drama and false learning to the truth. ⁽⁸⁾ (下線筆者)

チアルディによれば、テニスで「ゼロ」のことを「ラブ」というのは love に元来 nothing の意味があったからであり、the egg に相当するフランス語の l’oeuf に由来するという俗説こそ「幽霊語源説」(＝似非語源説)の典型であるという。

「幽霊語源説の方がことによると正しい語源よりも面白いかもしれないが、似非語源学者は常に真実よりも虚構の方を好むのである」というのが彼の主張である。そういう彼はまた「似非語源説と民俗語源説とを混同してはならない」と言い、いかにも民俗語源説を擁護する口ぶりであるが、前者がいわゆる「でっちあげ」であり「当てずっぽ」であるのに対して、後者が詩的なプロセスであるところをさすがに詩人らしく高く評価しているのであろう。

「背広」の語源について

「背広」の語源についてまだに大まじめに取り沙汰されている語源説の一つに例のロンドンの高級テイラーの町「セビル・ロー」Savile Row 説がある。いうまでもなく、Savile Row が高級紳士服のメッカだからそれを訛って「セビロ」といい、「背広」という字を当てたのだという俗説である。いづれにせよ、最近の国語辞典の中で「背広」の語源について最も念の入った説明を載せているのは次の例であろうが、その中で「背広」という表記を当て字であると断言しながら、「背幅が広いことからとも」などと書いている

のは滑稽としか言いようがない。

語源未詳で、「背広」は当て字。フロックコートなどと違って、背幅が広いことから、civil clothes（市民服の意）または Savile Row（ロンドンの洋服屋街の名）からなどともいわれている。⁽⁹⁾

ところで、調べてみると Savile Row が仕立屋の町になったのは19世紀末以降のことであり、一方「背広」という語はそれ以前から存在していたことが分かる。もう一方の civil clothes 説については、ごていねいにも、ペルリ提督の浦賀上陸というわが国の歴史上画期的な事件と深く関わっているらしいという説まである。つまりペルリの率いる黒船の乗組員たちは最初は警戒のため武装して軍服で上陸したが、日本人に戦意がないのを見て取っていったん船に帰り、平服に着替えて改めて上陸したというのである。しかしこれなどはあまりにもよく出来すぎた話であってかえって眉唾物と言わざるを得ない。語源説にはとかく尾ひれがつき易いものなのである。結局、いきさつはどうであれ、「平服」即ち civil clothes もしくは civil coat が一部音訳、一部和訳されて「背広服」となり、のちに「服」が落ちて「背広」となったと考えるのがいちばん妥当ではあるまいか。

注

- (1) Mario Pei, *What's in a Word*, (Hawthorn Books Inc., 1968)
- (2) *Encyclopedia Britannica*, (1986)
- (3) ブリタニカ国際大百科事典 (TBS ブリタニカ, 1972)
- (4) Joseph T. Shipley, *The Origins of English Words*, (The Johns Hopkins University Press, 1984)
- (5) Eric Partridge, *A Dictionary of Slang and Unconventional English, Vol. II: The Supplement*, (Routledge & Kegan Paul, 1979)
- (6) William and Mary Morris, *Morris Dictionary of Word and Phrase Origins*, (Harper & Row, 1980)
- (7) John Cialdi, *A Browser's Dictionary*. (Harper & Row, 1980)
- (8) John Cialdi, *A Second Browser's Dictionary*. (Harper & Row, 1983)
- (9) 大辞泉 (小学館, 1995)

Out of my Etymological Field Notes 3

Yoji Kawano

This is the part 3 of the essay on etymology, chiefly English by the author. It consists of six chapters, the titles of which are: Mario Pei's Ignorance; *Barikan* (hair clipper), *Manten* (rubber sandal) and *Appappa* (simple one-piece dress for summer season), all of them being Japanese colloquial words; The Greek Word *thalassa*; The Complete Origin of *southpaw*; 'Spook Etymology' and *love* in Tennis; and The True Origin of *sebiro* (Western suits), a Japanese word of dubious origin again.

The essay aims at detecting erroneous descriptions concerning some English words or trying to make accounts more precise, usually quoting passages from books written by world-famous authors and scholars.

As mentioned before, also included are two chapters intended for the origin of four Japanese words, three of them deriving from foreign words, and one is the special case of a regional dialect.